

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	あゝ龍南よさらば（詩）
Author(s)	長谷川，公一
Citation	龍南會雜誌， 1 7 1： 7 2 - 7 4
Issue date	1919-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6553
Right	

は俺が通つて來た様なあれ程の否定の力をば一度
だつて夢に見たことがないのだ。しかも、俺はこ
の手合に教はれて居るのだ……」

カラマツフ兄弟

結 末

彼の行くべき人生の行路はまだ遠い。一條の白い道
が夕方の靄のうちにかくれて先きは見ぬ。彼れは
この一條の道をたどりつゝ今夜も亦何處の軒下か、
むさくるしい田舎屋の一室に一夜をすごすのであら
う。(終)

附言(武夫原に咲く淡い月見草の匂ひに酔うて四年の龍南生活は
長い様で短かいものだつた。赤煉瓦の一枚一枚が私の細胞
の奥に浸み込んでこれを名残に私は何處へか飛び去るの
だ赤い野獸の様な顔をして南から北東から西と臭い息をふ
きつゝ追つた私の靈は永くここに止まるであらう。)

あゝ龍南よさらば

一、三、甲一 長谷川公一

いざさらば思想の搖籃 新なる智識の母胎
翹望と渴仰に燃わさかる 太陽の光豊なる

あゝ龍南の天と地

學海の權威東海の秀才

文を悦び武を思ふ

朱の石永へに搖がじ

堂に溢れて原に満ち
白金の針榮光眩しく

垂千の健兒ローレルの

春に蒸されて陽に酔へば

紅燃ゆる熱と意氣。

冠を想ひ南國の

若き心は謳はずや

言論の自由思想の不羈

瑞邦の館濟美の堂

舌端火を吐き藻花紅より赤し

白草の原龍田の嶺

龍南のモットー「剛毅朴訥」蔽衣風を通し破帽日を遮り

優柔影を潜め懦弱地を拂ふ あはれ大人格の養成

偽善なく虚飾なく空名なし

固陋と因襲と曲學と 株を守り舟に刻み

閥族に走り權勢に頼る 好智に眉を顰むる者

見よ純眞の若き子を

呻吟と焦慮と懊惱と
文弱に流れ疑惑に墮つる
訪へ潑刺の意氣の里

世は黃白の波立ちて
虛妄梁を超へ
來れ南溟至純の地。

呼吸よ暫らく静なれ
夕空清く輝ければ
胸を繞りて流れずや

視線よ暫らく動かざれ
陽炎白く燃ゆる時
瞳にうつり映ゆるべし

あゝ逸樂の美酒
紅き涙を手に灑ぎ

傷に戦き世を恐れ
情風に顔を背くる者

時は思潮の色濁る
偽善世を蔽ふ時

大いなる山阿蘇の火の
悠久の聲若人の

春暖かき武夫原の
永遠の色青年の

盃を洗ひて一滴の
焰と燃ゆる熱き血を

交へて君よすゝり飲め

たい感激と純眞と
男の子の眼に金光を
若い力を比へ見よ

憎みも知らず怨みなく
天を尊び地に和み
義を思ひては人に泣く

誰か名づけし三四郎
大いなる人漱石が
懐しい名の三四郎。

今黎明の時は來て
南歐猛虎の宰相と
地圖を彩り世を造る

三年飛ばず鳴かすとも
今龍巖の下にして

たとへば潔き南國の
投ぐる黎明の太陽と

嫉みも知らず傷みなく
草を抱いて鳥を愛で

一代の精華文壇の驚異
恵を享けし寵兒達

北米無冠の帝王と
雲を拂ひて日を仰ぎ

飛ばし千里を駆けん哉
雄飛の秋をしのべし

回天の業君にあり

さらば龍南いざさらば
紅^{べに}より赤^{あけ}き朱の石
夕に白き月見草。

瞳の黒き若人よ
朝紫のダイヤ草

(終)

月見草の別離

文三、桑野豊助

みかへりぬ ふたゝびみたび
別離の思ひに夕の空を

月見草 何を悲しみさはうなだる

三年の契 あゝそれも

さらばさらば やさしの花よ

いまさらに涙流るゝ

なよやかな夢の月見草

月にまたゝく黄なる花びら

その甘きしめり香かげば

ひたすらに心はふるふ

さな病みそ別離の痛傷の
小夜更けて深く泌むとも

うす黄色なる花が散る

うす黄色なる花びらは

早やかはたれの薄あかり

うるみたる雨の瞳に

月見草もちて夢思ふ

かすかにほろゝ涙する

宵闇の面帕の中に

淡つけき思ひもて若き日を泣かむとする

黄なる君の睫毛の

ほのかに濡れて愁ふる

美しき月もすゝり泣けり

あまき香も露にしめりぬ

さはれ君別離の愁は

あはれそのやはき溜息 野邊の月見草

かなしみてあらばありなむ